地域プラス

ルート ひと

スポーツ界に経営の視点

バスケットボールBリーグの初代チェアマンで、現びわこ成蹊スポーツ大学長 大河（おおかわ） 正明（まさあき）さん（64）

＝京都市下京区

銀行員からスポーツ界へ、さらには教育界へと、ここまで多彩な経歴をたどってきた人物も珍しいのでは。そう水を向けると「そのときに巡り合った仕事を楽しいと思ってできるタイプなんですよ」。朗らかな口調が返ってきた。

最初の転機は36歳の頃。勤めていた三菱銀行（現三菱UFJ銀行）からJリーグへと出向を命じられ、運営に携わった。当時はリーグ発足から3季目。開幕直後の人気が下火になり「リーグがつぶれないために皆必死だった。同時にこんなにすごい仕事はないなと思った」。多忙な日々を過ごす中で、ファンと喜怒哀楽を共有し、感動を届けられる仕事の魅力に触れた。

数年で銀行に戻り、支店長などを歴任した後の2010年、クラブライセンスマネジャーとして再びJリーグへ戻る。ミッションは赤字クラブをなくすこと。銀行員時代に企業と融資に関する交渉をした経験が生きた。ビジネスポリシーである「現場100回」を貫き、全国各地のクラブ経営者と膝を突き合わせて赤字の原因や解消策について議論。単年度赤字の連続など財政状況に応じてリーグ参加資格の可否を審査するライセンス制度を築いた。

財政健全化のめどが付いた頃に声がかかったのがバスケットボール界だった。Jリーグ時代の上司だった川淵三郎氏の後を継ぐ形で、当時名前も決まっていなかったBリーグの立ち上げに尽力し、15年に初代チェアマンに就任する。ゼロからのスタートにリスクもあったが、決断の背景には「人生で最高に楽しかった」という少年時代の経験があった。

京都市西京区出身で、洛星中から洛星高へ進学。中学ではバスケットボール部に入り、中学3年の頃には既に170㌢を超える長身で、全国大会4強入りも果たした。過剰な猛練習やしごきが珍しくない時代だったが、体罰や上下関係もなく自由な雰囲気の中で育った。「上下の差別もないフラットな環境だった。その影響か（社会人になっても）誰かを押しのけてでも上に上り詰めてやろうとか思ったことがない。いろんなキャリアを歩んできたが、自分に出番があればおのずとそういう話が来るだろうし、なければ来ないだろうし」。おおらかでポジティブな性格の原点になっている。

Bリーグでは19年に将来構想を策定。クラブの経営力を重視し、世界レベルのリーグへと発展を目指す道筋を立てた。翌年には後任に席を譲り、21年にびわこ成蹊スポーツ大の学長に就任する。

銀行からJリーグ、Bリーグ、大学。多様な世界を渡り歩いてきた。その中で大切にしてきた言葉は「世の中『前後左右』『東西南北』どちらに動いているか感じる力が必要」。30代の頃、スポーツ用品メーカー「モルテン」の先代社長から教わった言葉だ。世の中の機微を敏感に感じ取って、常に先を見越して行動することを肝に銘じ、「世の中の向かう方向に、自分をどうアジャストするか。ビジョンを描いてきた」。

学長就任から数日後には新たな中期計画を打ち立て、現在は人材育成に取り組む。「スポーツ界の課題の一つが経営人材の養成。人材を供給することでスポーツ界に恩返ししたい。まだまだ新米学長ですけど」。磨いてきた先見力で、大学界でも改革を目指す。

（辻孝典）

異色の経歴 社会の機微先読み

▲ 学長を務めるびわこ成蹊スポーツ大のキャンパスに立つ大河さん（大津市北比良）

学長室で職員と話す大河さん

▼ Bリーグ開幕初年の日程発表会見で、ポーズをとる大河さん（中央）と各チームの選手たち＝2016年6月10日、東京都北区

取材テーマを募集！

京都新聞社は、双方向型報道「読者に応える」に取り組んでいます。読者の身近な疑問や困りごとを基に記者が取材します。取材テーマや情報をお寄せください。

LINEは下記QRコードを読み込んだち登録し、やりとりしてください。メはminna@mb.kyoto-np.co.jp

ファクスは075（252）5454。